

令和 2 年 5 月 2 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02009

研究課題名（和文）他性と場所

研究課題名（英文）Otherness and Place

研究代表者

中 敬夫（NAKA, Yukio）

愛知県立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：80254267

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：多少なりとも自我中心であった近世哲学に対する諸反省から、現代哲学では他者問題が隆盛を極めるようになってくる。しかしながら、他の主観が私という主観にとっては対象でしかないということから、他者問題は最初から、様々な困難を抱えていた。われわれはこれを、「場所」という概念を用いて解明したいと考えている。

そのさいわれわれが批判的研究の対象として主題化したのは、まずフッサール、シェーラー、ハイデッガー、サルトル、メルロ＝ポンティ、レヴィナス等々の現代現象学的他者論であり、次いでその源流としてのフィヒテ、また日本における西田幾多郎の哲学である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

他者問題は、現代においては焦眉の問いとすることができるであろうが、フッサール、シェーラー、ハイデッガー、サルトル、メルロ＝ポンティ等々、あるいはレヴィナスなどの他者論を、ただ個別的に扱うだけでは、本当に他者問題を他者問題として考察したことにはならない。様々な観点を総合的に検討することこそが、今日において肝要なのである。

本研究は上記の哲学者たちだけでなく、現代他者論の源流とも言うべきフィヒテの他性論や、西田のそれも含め、〈他性と場所〉という一貫した観点から取り扱ったという点において、独自のその学術的意義や社会的意義を有していると言える。

研究成果の概要（英文）：Reflecting on the self-centered standpoint of the modern philosophy, the contemporary philosophers thematize often the problem of the others; but this question has contained various difficulties from the beginning, because another subject is merely an object for me as subject. And we intend to clarify this problem by means of the concept of "place".

The philosophers whose thoughts we wanted to examine critically were first the contemporary phenomenologists: Husserl, Sheler, Heidegger, Sartre, Merleau-Ponty and Levinas, then Fichte as the source of this matter, and finally a Japanese philosopher Nishida Kitaro.

研究分野：哲学

キーワード：他性 場所 他者 神 非我 現象学 フィヒテ 西田幾多郎

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 多少とも「自我」中心であった近世哲学についての深い反省から、現代では「他性」に対する関心が高まってくる。20世紀は 21世紀も含めて 他者論が隆盛を極めた時代であったと言ってよい。しかしながら、自我という主観にとっての対象〔客観・客体〕でしかない他我の主観の存在を立証するという他者問題は、最初から様々の諸困難を抱えていたと言うこともできる。フッサールを嚆矢とした現象学的他者論やレヴィナス、あるいは現代他者論の源流の一つともみなしうるフィヒテの他性論、さらにはまた日本では西田幾多郎の哲学などを批判的に検討することは、今日においては現代哲学にとって、言わば必須にして緊急の課題なのである。

(2) 筆者はこれまで「自然の現象学」という大きなテーマのもと、28年の長きにわたって一連の現象学諸研究を続けてきた。当初の構想では、それは 感性論(空間・時間)、論理(「多なきー」もしくは「一におけるー」)、実在と表象(自然と文化)、自由と非自由(行為と無為)、身体論(身体の発生論的構成)、他者論(自然における他者と文化的他者)の六部から成るべきものであった。そしてじっさいに筆者は、このテーマに限ったとしても、これまですでにこの全体構想のなかの と を扱う『自然の現象学 時間・空間の論理』(世界思想社、2004年)、 に関する『歴史と文化の根底へ 《自然の現象学》第二編』(世界思想社、2008年)、 を主題化する『行為と無為 《自然の現象学》第三編』(萌書房、2011年)、そして を論ずる『身体の生成 《自然の現象学》第四編』(萌書房、2015年)を上梓してきた。それゆえ今回の研究テーマ「他性と場所」は、「自然の現象学」の全体構想のなかではその に相当する部門に相当するものであり、かつ、全体構想の一応の完結をめざすものである。

2. 研究の目的

(1) まず概括的に述べるなら、筆者の研究課題「他性と場所」が行おうとしているのは、いわゆる他者問題を、<他者の他性>つまり他人・他我の他性と<神の他性>という二つの問題圏に分けつつ、両者相互の関係ならびに両者と「自我」との関係を、それら〔他者、神、自我、それらの諸関係〕がそこにおいて立ち現れるような「場所」という観点から考察しようとする、一種の現象学的研究である。もう少し詳しく言うなら、「他者」と「私」とが会おうような「場所」を「自然」と「文化」とに分けて考察し、そのうえで、「神」を或る「場所」において出会われる絶対他者とみなすような考えに対しては反対し、むしろ「神」それ自身を一つの「場所」とみなすような考えを深化してゆくことが、本研究の究極の目標となるのである。

(2) 具体的には、まず古典的な他者論のどこが間違っていたのかを、確認することから始める。「古典的」な他者問題とは、ここでは、典型的にはフッサール、ハイデッガー、サルトルにおいて見られるような問題構制を指す。それらの立場を筆者自身の言葉で簡単に言い表すなら、フッサールは他者問題を<他者を見る>と定式化し、ハイデッガーは<他者と共に見る> ちなみにそこにはすでに「文化」の問題が含まれている と、そしてサルトルは<他者によって見られる>と定式化した。そして現象学の内部では有名な話だが、ヘルトはその高名なる他者論文(1972年)のなかで、フッサール流の他者構成論は、ハイデッガー式の「共・有(Mitsein)」を前提としなければ成り立たないという結論を導き出した。しかし筆者の考えでは、ヘルトの推論には幾つかの不備がある。その最たるものは、ヘルトが「他者が〔私とは〕別のところから〔現在、私と〕共に〔同じものを〕見ている」ということ、つまりは私も「他者と共に見ている」ということが、そもそも如何にして成り立つのかということ、問題にさせずに、ただ前提しているだけだということである ちなみに同様の不備は、正反対の方向から、『存在と無』第三部におけるサルトルの有名な他者論についても指摘されうるであろう 。そしてたとえこの問題がクリアされたとしても、そのような前提のもとで遂行されるフッサール流の他者構成論には、依然として問題が残る。それとは逆に、メルロ=ポンティの考えの一部やシェーラーには、自我と他我が未区分であるような一種の混沌状態から出発して、他者問題を解いてゆこうとする傾向がある。筆者は或る条件つきで、このような考えを認めようと考えてはいるのだが、しかしそのまえに、このような考えに対する強力なアンチテーゼとして登場したレヴィナスの思想を、検討しておかなければならない。そのさい結局問題となってくるのは、他我や自我がそこにおいて成り立つような「場所」である。またもしそのような場所が<一なるもの>として先在するのであれば、如何にしてそこから<二>なり<多>なりが生まれてくるのかという古代ギリシア以来の難問が、またまた生じてくることになる。筆者はその問題を、フィヒテの思想を検討しながら考察してゆきたいと考えた。そしてそのような考察の最後には、西田幾多郎の「場所」の考えとの、或る種の対決が試みられる。筆者は西田の「歴史」中心の考え方、「否定」、「矛盾」、「弁証法」への過度の依存、エリウゲナに言及しながらも「創造しも創造されもしないもの」の主題化において途絶し、むしろ「作られたものから作るものへ」の過程を尊重し続けるというような態度に対して、従前から若干の疑問を抱いていた。それゆえ、たんに先哲の言を鵜呑みにするのみならず、筆者なりの生産的な対話を図ることが、本研究の最終的な目的なのである。

3. 研究の方法

(1) まずフッサール、シェーラー、ハイデッガー、サルトル、メルロ=ポンティ等々の現代現象学における代表的な他者論に、トイニセンやヴァルデンフェルス、ヘルト等の著名な諸研究も加

えて、筆者の言うところの「二〇世紀の古典的他者論」について検討する。たとえばフッサールに関しては、私の視界に現れた「たんなる物体」を他者の「肉体」とみなしうるために、私の「肉体」という意味をそこに「移入」することによって「他者を見る」という、彼の他者構成論が検討される。逆にハイデッガーにおける「ひと」論は、不特定の「ひと」一般と共に私が何かを見、何かに携わっているというような「他者と共に見る」を基本とした他者論である。ヘルトはフッサールの理論を批判的に検討しつつ、ハイデッガーのような結論に達したのだが、逆にサルトルはハイデッガーを批判しながら、「他者によって見られる」を第一に置く。しかしながらメルロ＝ポンティやシェーラー等の考えをも利用しながら筆者が確立したいのは、それらのいずれでもない考え方である。

(2) 次いで本研究は、レヴィナスの他者論の検討に移行する。まず留意しておかなければならないのは、レヴィナスにおいては「他者の他性」と「神の他性」が密接に関連し、ときとして両者を区別することさえ困難なときがあるほどだということである。それゆえ筆者は、レヴィナスも援用することの多かったデカルトの「無限」の観念にもとづきつつ、「神の他性」と「他者の他性」の関係という問題に着手する。そのさいデカルトの「神」に関しては、マリオンなどが指摘する「有神論」の問題も、併せて検討することになろう。なぜならそれはレヴィナスの問題でもあったからである。そしてレヴィナス自身に関して言うなら、他者に絶対的な優位を認める彼の「非対称性の倫理学」は、その妥当性に関して、批判的に検討されることとなる。

(3) しかし筆者のレヴィナス論の究極の目的は、たんにレヴィナス哲学の不備を指摘することだけではない。筆者はレヴィナス倫理学が成り立つためには、レヴィナスが表立ってはあまり言及することのなかった或る諸前提を、認めなければならないのではないかと考えている。それは自他間の或る種の「対称性」や「相互性」ないしは「共同性」に関わる諸事象である。それはレヴィナス自身がふと漏らすことのあるような、彼自身の諸言説からも窺い知ることができるようなものでもあるのだし、理論的にも認めなければならないような諸前提である。つまり筆者は、レヴィナスには「相互性以前の非対称性」という彼の表明的な考えの奥底に、「非対称性以前の相互性」というものがあるのだと考えている。「場所」や「空間」に関する彼の主張も、その観点から検討し直されることになろう。

(4) 翻って現代の他者論の原型のようなものが、「絶対的自我」の哲学と称せられることの多いフィヒテに見出せるのは、興味深いことである。筆者はまずフィヒテ哲学の時代区分という問題に着手して、それを前期・中期・後期に三分し、それぞれの時期で他性の問題について検討する。つまり、たとえば前期においては「神の他性」の問題はほとんど目立たないのだが、「促し」概念を中心とした「他者の他性」の問題の主題化は本格的だし、さらには「非我の他性」に関するフィヒテの扱いも興味深い。また中期に顕著なのは、逆に「神の他性」の問題であり、また後期には「神の他性」の問題も「他者の他性」の問題も、ともに見出すことができる。しかしながらフィヒテのアプローチは、現代の他性論の先駆けのような位置を占めているからこそ、かえって現代哲学が抱えているような諸困難も、予見させるようなものとなっている。

(5) 他方、西田哲学においては1926年の論攷《場所》の前後から「場所」の考えが彫琢され始め、そのことは1932年の《私と汝》を中心とした彼の他者論にも、大きな影響を及ぼすこととなる。「場所」と「汝」の、もしくは「彼」の問題を中心に、全時代にわたる西田の動向を通覧するのが、筆者の第一の目的である。しかし第二に、「闘争」を基軸とした西田の他者論には、どこか彼の真意にそぐわないものを筆者が感じたのも事実である。それゆえ西田哲学における「否定」や「矛盾」や「弁証法」について再検討してみることも、本研究の重要な課題となってくる。その問題は、「歴史的な自然」と「生きた自然」との関係という問題や、「作られたものから作るものへ」という西田の考えと彼が好んで引証したエリウゲナの「創造されもせず創造もしないもの」との関わり合いという問題をも巻き込んで、最終的には「場所」を「於てあるもの」から考えるのか、それとも「場所」それ自身において考えるのかという問題に帰着しよう。

4. 研究成果

(1) 20世紀の古典的他者論に関しては、ヘルトのフッサール批判の不備を正確に示しえたことと、「他者によって見られる」を第一に置くサルトルの他者論が、結局のところ彼が当初目指していた他者の具体的存在には届かず、かえって彼の批判していたハイデッガーの「ひと」の考えに帰着してしまうか、あるいはもし彼が本当に具体的な他者に到達したいと思うなら、その成否はともかくとして、彼の「他者によって見られる」は、フッサール流の「他者を見る」に舞い戻ってしまうよりないであろうということ、きちんと論証しえたのは、大きな収穫であったと思う。ただしメルロ＝ポンティやシェーラーを利用しつつ、筆者が結論したこととは、自他の分かれる以前の大きな生から出発して具体的な他者存在の特定にたどり着く道は、たしかに蓋然的には可能だが、しかしそれは絶対確実性を有するものではないということであった。

(2) レヴィナスに関しては、その哲学や倫理学における或る種の曖昧さや問題点を指摘しえた

ことは、一つの成果であったように思われる。またレヴィナスとの関連で、「神」についてのデカルトの考えに関しても、本格的に検討することができた。レヴィナスの研究者のなかには、筆者から見るとレヴィナス信者ではないかと疑いたくなるような、或る種の盲目的な信奉しか示さないような者も多数いるようなのだが、それではいけない。またデカルト理解に関しても、彼のいわゆる「自己原因」に関しては、最近の第二次文献も駆使しながら、その「有神論」解釈を批判することができたし、何よりデカルト専門家のなかには「永遠真理創造説」を称揚する者は多いのだが、むしろデカルトには「永遠非被造真理」というものも見出されるのであって、たとえば「有神論」という解釈を批判することが問題とされるときでも、大事なのはそちらのほうだと主張したのは、当初の予定にはなかった大きな成果である。

(3) またレヴィナス解釈に関しては、とりわけ様々なケースで彼の思想のなかには「非対称性」以前に「対称性」があるのだということを、逐一指摘することができたのは、従来のレヴィナス解釈にはなかったような大きな収穫だと思われる。それは、たとえば「本質的に非対称的な或る《空間》」という問題に関して、「相互主観的空間は初次的には非対称的である」とか、あるいは「相互主観的空間は対称的ではないと言うことができる」と言われるさいにさえ認められるべき、同じ場所にあるという「空間」の共同性である。そしてレヴィナスが「相互主観的空間の湾曲」に関して「このような“空間の湾曲”は、おそらく神の現前そのものである」と述べるとき、他者も私もそこにあるはずのこのような「空間」こそが「神」であり、そもそも「神」とはこのような「場所」なのである。

(4) フィヒテにおける「非我」の他性に関しては、たとえば「物自体」の問題は、絶対的自我、実践的自我、理論的自我のあいだの齟齬や葛藤から理解されているのだということを示した。また彼の有名な「促し」他者論や、それに関連するその後の彼の他者論も、じつは普遍的・一般的意識からの個体的意識の発生もしくは生成が問題とされているのだということ、正確に証示したように思う。そのような試みが、論点先取りの誤謬か、デウス・エクス・マキナに陥ることを、指摘したこととともに。また中期・後期の「神の他性」に関するフィヒテの諸言説を検討するに、結局のところこの問題に関して、フィヒテは「絶対者の絶対的な自己顕現」と「有限者の有限的な顕現作用」とを、あらかじめ事実として前提しておかなければ、彼自身の議論が成り立ちえないであろうという結論が得られた。

(5) 西田の他者論が「闘争」を基軸としているのは、私や汝の「於てある場所」が、「否定」や「矛盾」によって、またそれらから成る「弁証法」によって、規定されているからである。しかし筆者は、むしろ「否定」や「矛盾」や「弁証法」を「止揚」して、むしろこれらを「包む」ものこそが、真の「場所」だという結論に達した。そしてもしわれわれが「場所」を「於てあるもの」から考えるのではなく、むしろ「於てあるもの」も、その相関者たる「於てある場所」さえいったんは捨象して、「場所」を「場所」それ自身において考察するのであれば「於てあるもの」は「多」と、また「於てある場所」は「多における」とみなしうるのであるからには「於てあるものなき場所」は、むしろ「多なき」ともしくは「一における」と規定されるであろうことが示された。

(6) 以上のように、筆者は現代哲学における他性の問題について、その源流たるフィヒテだけでなく、デカルトにまでさかのぼり、また西田哲学まで射程に収めることによって、かなりの程度スケールの大きい研究をなしたように思う。そしてそのさい筆者は、けっして場当たりのコメントや批評を残すのではなく、およそ30年に及ぶ筆者自身の変わらぬ立場というものを十分に自覚しながら、このような諸考察を貫徹したのだと信ずる。それゆえそこには、たとえ筆者以外の者が断片的に同じようなことを述べたのだとしてもまったく無意味であるというような、筆者ならではの諸成果が、含まれていると言うことができよう。

(7) なお筆者は、2016年には「サルトルと20世紀の古典的他者論の問題構制」(『愛知県立芸術大学紀要』No.45)、2017年には「神の他性と他者の他性——デカルトとレヴィナスにおける『無限』の観念」(『愛知県立芸術大学紀要』No.46)、2018年には「初期フィヒテにおける他性の問題」(『愛知県立芸術大学紀要』No.47)、2019年には「後期フィヒテの他者問題」(『愛知県立芸術大学紀要』No.48)、2020年には「Natura quae nec creat nec creatur——西田哲学における創造/非創造と歴史/自然の諸問題をめぐって」(『愛知県立芸術大学紀要』No.49)という論文を公刊し、また2017年には『他性と場所——《自然の現象学》第五編』(萌書房)という著作を上梓した。以上は論文や著書というテキスト形式での本研究の成果である。ちなみに本年度中には『他性と場所——《自然の現象学》第六編』(萌書房)という新著が刊行される予定であって、すでに完成原稿が出版社のもとに送られている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 中敬夫	4. 巻 49
2. 論文標題 Natura quae nec creat nec creatur 西田哲学における創造/非創造と歴史/自然の問題をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 57～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中敬夫	4. 巻 48
2. 論文標題 後期フィヒテの他者問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 17～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中敬夫	4. 巻 47
2. 論文標題 初期フィヒテにおける他性の問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 37～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中敬夫	4. 巻 46巻
2. 論文標題 神の他性と他者の他性 デカルトとレヴィナスにおける「無限」の観念	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 99～112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中敬夫	4. 巻 45巻
2. 論文標題 サルトルと20世紀の古典的他者論の問題構制	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 愛知県立芸術大学紀要	6. 最初と最後の頁 3～16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中敬夫	4. 発行年 2017年
2. 出版社 萌書房	5. 総ページ数 488
3. 書名 他性と場所 《自然の現象学》第五編	

1. 著者名 中敬夫	4. 発行年 2015年
2. 出版社 萌書房	5. 総ページ数 498
3. 書名 身体の生成 《自然の現象学》第四編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----